新春文芸

―土浦の四季を詠んだ短歌・俳句・川柳―

春の短歌

早春の霞浦の湖去る鴨たちの手荷物もなき姿見送る

春になると鴨や白鳥が北の地へ飛び去る。その姿を見ると手荷物一つない。この簡素にして強靭な日常性から学びたい。

栗田　幸一

芽吹き初む亀城の柳枝垂れおり二月の風の頬にやさしき

亀城公園のお堀の柳が芽吹き初める頃、まだ寒いが、頬に当たる風は何となく温い。春を感じる一瞬である。

平澤　良子

土浦の桜川の端にさくら爛漫霞浦のポプラにうぐいすの鳴く

土浦の花は桜、木はポプラ、鳥はうぐいすです。水都土浦は実に自然豊か、春繚乱です。

高井　昭

大池のほとりに並ぶ桜木の小枝莟みて山と語らふ

わが家から程近い乙戸沼公園は、借景として筑波山があり、とくに春には霞みがかかって美事な景色になります。

市島　紀郎

亀城の水仙さやさや緑葉のばしつつ花芽はすでに春を待ちおり

香り豊かな水仙は青青と葉をのばし花芽も膨らみ春を待っている。原産は地中海沿岸と言われ楚楚と咲く姿はお正月にふさわしい。

井上　寛江

夏の俳句

雷神も潜りぬけたる櫓門

土浦の歴史を見続ける城址の櫓門は、桜吹雪、鯉のぼり、柳をお濠に映し、いまも市民に愛され、人々の心をなごませている。

高田　智子

蓮の花白しコロナよいつ消える

世界中に、今も猛威をふるっている新型コロナ。令和三年には蓮の花の白さに浄化され、コロナが早く終息されますように。

土田　信子

筑波晴れ白蓮揺るる常磐線

北に筑波山を望む土浦。常磐線が駅を過ぎると、すぐに蓮田が広がる。今を盛りの蓮の花の白さ。風を感じるいっときは楽しい。

沼尻　芳子

畦道に家族一列大花火

以前、土浦の花火の打ち上げ場所は田んぼで見晴らしがよく、家族で畦道に腰掛けて楽しんだ。子どもたちの顔も輝いていた。

福嶋マスイ

夏祭り声のはなやぐ城下町

土浦は歴史のある城下町。亀城公園を中心に、練り歩く山車と踊りの行列は、華やかであり、市民に活気を与えてくれている。

増田　洋子

秋の川柳

スターマイン仰角変えず二分半

土浦全国花火競技大会のスターマイン部門は、二分三〇秒以内、四〇〇発以下での競い合い。桜川畔の光と音の大スペクタクル。

木内たけし

常陸野の秋をしみじみ愛でる日々

土浦市とその周辺の市や町は自然が豊かで公園もたくさん。そのうえ東京まで一時間の日帰り圏。住む満足度の高い所です。

兵頭猫目石

歓声に得意顔する花火たち

夜空に打ち上げた尺球の花火が、頂点で開いた瞬間、地上では歓声があがる。花火たちにとっては、この歓声が一番嬉しいのだ。

高木ひろし

白鷺へ落穂残して農終わる

白鷺の餌の泥鰌や田螺が姿を消してしまった。収穫後の落穂が越冬の糧に。来春は雛と元気に湖上を飛ぶ姿を見たいものだ。

谷藤美智子

舞い落ち葉五感が秋の詩を唄う

四季の中でも土浦の秋は格別。酷暑の後静謐で透明感漂う自然。秋は人の感覚を鋭敏にする。天高く馬肥ゆる秋が人を詩人にもする。

富永　柳道

冬の短歌

蓮根掘る蓮田に人の笑い声コロナの前のような青空

霞ヶ浦の周辺に広がる蓮田に、太陽の光がまぶしく射して、いつもと変わらない光景に新年を迎え新たな希望が湧いてくる。

井上　秀子

風車回る霞ヶ浦の湖畔に佇みて終の地にあらば景色に親しむ

信州の山国より来て、広い平野の温暖な土浦を終の住処と決め、霞ヶ浦の風景や公園に癒されている。

腰山　佑子

短歌一首すぐに生まれる気持ちなり常磐線より見る枯れ蓮田

車窓から眺める蓮田の四季折々が好きだ。冬の枯れ蓮田には風情があり、蓮根掘りの風景に出合うと心が和む。

小松﨑みずえ

千代の春天空へ飛翔す白鳥のおび凛凛しく麗し愛の絆や

燦然と輝く太陽へ天翔る霞浦の白鳥。父の先導に、子は従い、後から母が見守り飛ぶ姿は、立派な愛ある家族。新春に相応しい光景。

櫻井　雅江

霞ヶ浦器一つの水なるに紫色ありあわき青あり

はるかに見える霞ヶ浦は紫色に静まり、足元のさざ波は青く光り乍ら輝く。個々に光り乍ら流れて居る。

山口　あさ